

なにと向き合っているのか

小林久美子

表現から反逆精神というものが消えてしまったとしたら、そこから先に新しいものを生みだしていく力は残るのだろうか。

表現者による反逆精神というものが時代時代の表現を輝かせてきたといってもいい。正岡子規の短歌革新や、塚本邦雄、岡井隆、寺山修司らの前衛短歌運動、加藤治郎、穂村弘、荻原裕幸らのニューウェーブ。それぞれの時代の精神の中を、彼らの表現はきらめきながら疾走していった。

わたし自身、現代短歌への接近は十代の半ばころ、知らずしらず「読み」から始まっていた。寺山の「テールブルの上の荒野」を読んで自由に色彩構成する、というような内容の課題が当時通っていた美術の研究所で出されたことが

きっかけだったように思う。これをどうやって平面に構成したのだったか、まったく記憶にないのだけれど、たちまち寺山の表現世界に魅せられたことはたしかだった。ひとりの表現者にのめり込むと、おのずとそこが渦まきの中心点となって、彼にまつわる人々や彼のまわりの表現作品の数々に出あいながら、自分自身が渦まきの広大な渦に巻きこまれていくことに気づくことになる。そうして、寺山の渦をぐるぐるとまわっていくうちに、わたしはいつのまにか岡井の『新編現代短歌入門』を手にすることになったのだった。

現代短歌に魅了され、入門書を読んでいくうちに自分も実作してみたい、という気持ちになるのはごく自然なことだろう。短歌の「実作」にあたって、直接的な影響をもたらしたのがその当時の潮流をなしていたニューウェーブだった。わたし自身がじっさいの短歌表現に足をふみ入れた地点は、そこだった。わたしはまさにニューウェーブから入っていったのだった。

洪水だあ、とはしゃいでたのは私です 　　むろんヨグ
ルトになっちまいましたが 　　加藤治郎
ひとしきり母の叫びが風に添う 　　雲のぶあぶあ草のれ
れっぱ

1000 二人のふ1000 001001 恐怖をかた1001
1000 0

「酔ってるの？あたしが誰かわかってる？」「ブー
ーウーのウーじやないかな」 穂村弘
ほんとうにおれのもんかよ冷蔵庫の卵置き場に落ちる
涙は

サバンナの象のうんこよ聞いてくれだるいせつないこ
わいさみしい
(結婚+ナルシズム)の解答を出されて犀の一日で
ある 萩原裕幸
月曜日の朝かへり来て酩酊にノブのQ O Q O Q O Q O Q
Q O Q
戦争で抒情する莫迦がいつばいあてわれもそのひとり
のニホンジン

加藤の『マイ・ロマンサー』、穂村の『シンジケート』、
萩原の『あるまじろん』からそれぞれ引いた。これらの中
にみられる会話体やオノマトペ、記号化、ポップアートの
な発想、言語のビジュアル化、自己戯画化は、一九八〇年
代末から九〇年代はじめにかけての日本の若い世代の文化
的背景と密接に関わりあっていた。

短歌は、特定の時代と特定の場所に位置づけられる。こ
の時代を世界的にみれば、ベルリンの壁が崩壊して東西ド
イツの統一があり、湾岸戦争があり、ソ連の解体があった。
一方の国内では、昭和から平成に年号が変わり、バブル経
済の全盛をむかえていた。世界のくらしい状況にあつて、日
本の文化だけは奇妙なかたがやきを見せていた時代だった。
彼らは、そして穂村、萩原と同じ年のわたしは、ベルリ
ンの壁を撤去したり、湾岸戦争に従事した若者たちとほぼ
同世代といつていいだろう。これらの映像をリアルタイム
で知ることができた最初の若者世代でもあった。世界の
状況を映像的に間近に感じつつ、バブル経済のただ中に浸
っていた私たちは、表面的にはいかにも楽しそうにしてい
たかもしれないが、内心では常に、このままでもいいのだろ

の壮きなる詩を
あづさゆみ春の労働のひまひまに歌を詠み書を読み花
も見たりき 高島裕

(我)といふ貨車引かれゆく実感のさびしさの行き止
まりで覚めたり 大口玲子
夜のうちに秋へゆくなり夢に沁みてわれを北上する水
のおと

今日を待ち張りつめてゐし胸ならむ魚跳ねて水のひか
り割れたり 横山未来子
パンなどを割りて分けあふ日を恋ふるひと組の手を膝
に置きたり

「鞆轡樹下心難歌」春の宵誘い出されるまま会いにゆ
く 島田幸典
昼食に足らいて午後の始業までをみじかきなりにきみ
を思えり

ボウフラを扱いにける研究が終りてボウフラもいなく
なりたり 永田紅
君ありし時間が鳥のように散るあの一階のおおきな時
間
空をゆく銀の女性型精神構造保持は永遠をまた見つけ
なほすも 黒瀬珂瀾
窓雪に吐息は沈み青年はスパルタびとの背にて立ちた
り

高島の『婦問ひ』、大口の『東北』、横山の『水をひら
く手』、島田の『on new』、永田の『北部キャンパスの日
々』、黒瀬の『黒耀宮』よりそれぞれ引いた。彼らは最近
歌集を出した二〇代半ばから三〇代半ばまでの人たちだ。

うか、という漠然とした心許なさを感じていたのではな
かったらうか。どうして日本だけが豊かでいられるのか。
そのときに感じていた奇妙な感覚のずれ、軋み、ブレ、歪
みといった、なんとも言いあてることができない、その場
に安寧することのできない、居心地の悪さだけがどこにと
もなく宙づりにされているような気持ちがあった。

そういう中で、彼らの作歌行為は、バブル経済の波をも
つとも自在にかぶることができた世代でありながら、それ
をもつとも敏感にいぶかしがっていたものか、それ
彼らの歌には否応もなくあの時代の地点での違和感や虚無
感がただよっているように見える。バブルに湧く日本が放
射したものに、反射板をかざして作歌していたのが彼らだ
ったような気がする。そしてそれが確かな作歌方法となつ
ていたように思う。世界の混乱と日本のバブルの板ばさみ
を武器に、短歌表現の豊かさの拡大を手に入れながら、精
神的には非常に冷めていた、その提示こそがするどい輝き
をはなつた。それがニューウェーブだったように思う。

日本の経済や文化がながく混迷を続けているうちに、現
代短歌のゆくえも明確な指針を見失ってきたのではないか
と思えることがある。なにを根拠に短歌を創るのか。なに
に對峙すれば手ざわりのある実感の歌になるのか。ニュー
ウェーブ以降、わたしたちはなにと向き合っているのか。
ニューウェーブから入ったわたし自身が、ずっとこの問
題に直面しながら短歌をつくってきたことになる。いま現
在の短歌の潮流を語るとすればどういうものになるのか。

テロリズム、言はるるごとく事実ならわれは頷へむそ

ポスト・ニューウェーブという視点で見るとき、彼らに
共通してあるのは、文語と口語の自然な配分による文体の
流れと、日常に即した私性の表出、ということになるだろ
うか。高島、島田、黒瀬といった男性陣はそれぞれに違つ
た実験的な試みを示唆しつつ、手堅い文体で歌を構成させ
ている。堅牢な思想に基づいた短歌の理念が、ていねいに、
実直に述べられている。

一方の大口、横山、永田の歌はやわらかな韻律を基調と
しながら、日常生活における機微や寂寥を、着実な比喻を
用いながら慎重な息づかいで綴っていく。

内面の心情に負担をかけることなく、率直に吐露する彼
らの姿勢には、自己への信頼に励まされた自己肯定が感じ
られる。そこにはしづかに抑制されてはいるけれど、内面
をみつめることへの安息がある。

寄せる波と引く波があるならば、いま現在の若い世代に
よる短歌の諸相は、ニューウェーブのころと対照してみ
るとき、引きもどされる波にあたるのかもしれない。海面が
なめされるように、つややかな伸びを見せながら引いてい
く波は、深い底のようにしずかではあるものの、同時に強
靱な力をたくわえていく行為でもある。

ニューウェーブを柔軟に潜ってきた彼らはもはやニュー
ウェーブ以前にもどれない自分たちを知っている。日本も
世界も社会的な危機にあえいでいるのを体にしるし。日本も
長してきた彼らは、すでにそれぞれ自らの歌の自律を確保
している。ニューウェーブの後をどう引き受けて何をなす
べきかの答は、これからとしか言いようがないけれども、
それが必要と感ずるならば、自分たちの手で編み出して
いくしか新しい方法はないということになる。